

宝島の歴史を辿る

# 台湾古道

# を行く 第2回



高雄市街より望む大武山山塊

【文・写真】西 豊稜

左から霧頭山(標高 2,736 メートル)、北大武山(同 3,092 メートル、台湾百岳の第 92 座)、南大武山(同 2,841 メートル)。北大武山は台湾原住民パイワン族の聖山である。

明治 28 年(1895)、日本の台湾統治が始まると、北回歸線が本島の中央部を横断するこの亜熱帯の地にあまたの日本人が渡り、魅了された。なかでも草創期にあつた日本の人類学界を熱狂させたのは、台湾原住民の存在だった。しかし、戦後、原住民の生活は大きく変わり、当時の文化、生活形態は消失してしまった。現在 14 族が認定されている原住民たちの先祖伝来の集落は遺棄され、亜熱帯の鬱蒼とした草叢樹木の底にひっそり沈んでいる。最近、台湾では父祖の地への回帰運動が起りつつある。私はこの失われた地の復活を祈りながら、100 年以上前である日本人が台湾の山中に辿った道を歩いた。



■右頁[右]チカタン社に到る産業道路より望むリキリキ溪谷

■左頁[右上]リキリキ社頭目の住居跡と榕樹(ガジュマル)の大木。頭目宅前には必ず榕樹があった  
[左上]リキリキ社旧集落付近のサトイモ畑。サトイモはパイワン族の主食だ。『生蕃行脚』には「皮の儘に煮て、外皮をむいて食ふのである。これは主食物として蕃薯より優ること数等で、食ふて腹具合と云ひ保ち方と云ひ蕃人の食物としては好適なものだと思ふ」とある。燻製した里芋もよく食べられている



### パイワン族の「秘道」を行く

現在、伊能嘉矩、鳥居龍蔵、森丑之助の3人は、台湾人類学草創期の三巨人と言われている。鳥居と森は明治33年(1900)、台湾本島最南部を居住地としていたパイワン(排湾)族の集落を訪ね歩いた。今から110年前のことだ。

その時の踏査行は、後に森が『生蕃行脚』のタイトルで講演することになる。兩人は、現在の屏東県春日郷から入り、来義郷を経て泰武郷へ、南から北へ踏査した。森が講演のなかで時間を割いて紹介したのは、リキリキ社(現春日郷力里)、クナナウ社(現来義郷古楼)、ボガリ社(同望嘉)の、当時集落規模が大きかった3社だった。

日本の台湾統治時代は原住民集落は「社」と呼ばれており、現在の台湾では、これらの旧社名は、現代の集落名の前に「旧」や「老」を冠して区別している。実際それらの旧集落跡を訪ねると、運が良ければ、パイワン族の伝統的な家屋様式である石板屋の壁の石積みと、住居内に残る柱の役割を果たす大きな石板(スレート)や、住居前

に敷かれた石板の回廊などを見ることができ、大抵は深い緑の下敷きになっている。

原住民の生活道、狩猟道、婚姻道、集落間の連絡道は、日本統治時代に警備道である「理蕃道」に整備された。現在では、多くの集落が先祖伝来の山間の集落を離れて、麓へと移動し、これらの道を歩く人はほとんどいない。しかも、新しい集落と旧集落を結ぶ道は、ちよつと山を歩くだけとはいかず、山や谷を横切り、長距離を移動せねばならないことがほとんどだ。今、当時の踏査行を辿ることは、まさに深い緑に覆われた「秘道」を探るよう進む旅となる。

### 浸水菅古道の大集落跡

屏東県水底寮と台東県大武を結ぶ浸水菅古道は、台湾の古道を代表する一つで、500年の歴史を持つ。今は、南台湾におけるマウンテン・バイク乗りのメッカになりつつある。その沿線にはパイワン族の集落が点在していたが、今ではすべてが遺棄された。そのなかで最大の集落がリキリキ社だった。『生蕃行脚』はこの集落から始まる。



みがえってくる。

### 戦歿勇士が眠る大地

来義林道から登山道を歩くこと6時間ほどでクナナウ社に辿り着く。クナナウ社は、現在の高雄鳳山と台東県太麻里を結ぶ崑崙掘古道の中央山脈西側段沿線にある。明治7年(1874年)、琉球の漂着民の虐殺をきっかけに日本が原住民討伐に出兵した牡丹社事件以降、清朝は台湾山岳部での道の開削を進めた。そのうち南部に開削されたのが崑崙掘古道だ。現在、この古道西段はクナナウ社へ到る道として、また中央山脈最南の衣丁山への登山道となっており、古道東段は一般に利用されていない。

クナナウ社は台湾ではよく知られている。というのは、第二次世界大戦中



[上]当時のリキリキ社で撮影された古写真。雪豹の毛皮で作った頭目の礼服を着た男性。左足下には、二つの杯をつなげた連杯がある。祝いの席で二人と一緒に酒を飲む時に使われる。(写真:東京大学総合研究博物館)  
[左]クナナウ社にある「戦歿勇士之墓」。第二次世界大戦末期、日本軍は台湾原住民から成る高砂義勇隊を編制した。合計7回編制され、フィリピンをはじめとする南洋諸島の戦闘に投入された。軍人ではなく軍属という扱いだったが、実際の戦闘に参加、多数の戦死者が出た

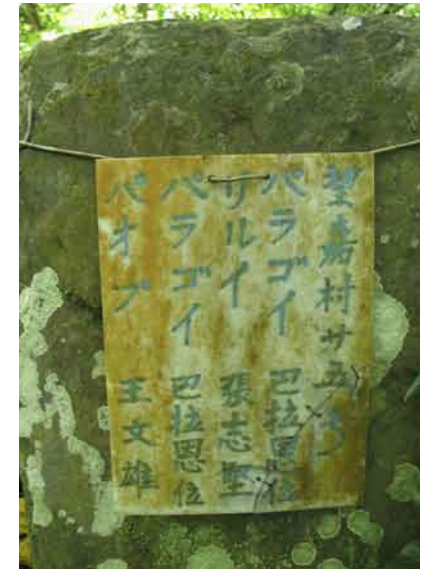
- 旧集落
- 1 カピアガン社
- 2 クワルス社
- 3 ライ社
- 4 ボガリ社
- 5 クナナウ社
- 6 チカタン社(老七佳)
- 7 リキリキ社
- 8 ツンロク社

- 現集落
- 1 佳平(現カピアガン)
- 2 泰武(現クワルス)
- 3 古楼(現クナナウ)
- 4 来義(現ライ)
- 5 望嘉(現ボガリ)
- 6 力里(現リキリキ)
- 7 七佳(現チカタン)
- 8 文案(現ツンロク)





■右頁[右上]ボガリ社旧集落の住居跡に残る表札。戦後も相当長い期間(一部地域では現在でも)カタカナが使われていた  
 [右中央]ボガリ社の祭場の祠の石板に彫られた守護神  
 [右下]ブツンロク社とボガリ社を結ぶかつての警備道  
 ■左頁[右上]チカタン社の伝統集落の藁の波  
 [左上]北大武山頂上稜線に残る日本統治時代の大武祠。鳥居階段の袂には高砂義勇隊顕彰碑の碑文のみが残る。60年の風雪(南台湾でも高地は積雪する)に耐えた木製の鳥居は、バシー海峡と南洋諸島を向いている



に日本軍の兵士として戦った高砂義勇隊の「戦歿勇士之墓」が現存しているからである。現代の台湾の人にとって「崑崙掘古道」クナナウ社遺構は、高砂義勇隊の墓「悲哀」というコンセプトのなかで理解されている。

「戦歿勇士之墓」は、村の入口を入ると山手側にわずかに残された住居遺構を見下ろすような形で立っている。高さ2メートル弱、幅60センチ強、パイワン族特有の一枚岩板の表面に「戦歿勇士之墓」と大書きされている。その墓碑の下には石製の小さな箱があり、頭髪、指の骨、爪が納められているという。同様の墓が、クナナウ社に

到る林道沿線に残るライキ社(現来義郷来義)跡にも現存している。こちらは完全な墳墓様式で銘文もあるが、一般

にはまったく知られていない。両墳墓とも、草深い父祖伝来の地にひっそりと眠る勇士の誇りを守っている。

#### 草むす頭骨架

ボガリ社は、台湾では一般に紹介されることはほとんどないが、『生蕃行脚』で森は時間を割いて紹介している。当時、原住民の間では、首狩りの風習があった。日本人の郵便物運搬を請け負っていたリキキ社の人々がボガリ社の人の首狩りに遭い、両部落間に緊張が走っている最中に森と鳥居はこれら二つの部落と一帯の原住民部落を踏査していた。森は、ボガリ社の頭骨架脇に吊るされていた、このリキキ社原住民の生首をかばんに忍ばせ持ち帰っ

ている。

森によると、ボガリ社には「昔から苔に蒸せし石畳のうちにある古髑髏のみでも四、五百顆を数へ、従来見た所のパイワン族蕃社の頭骨架のうちでも最大なるもの」がかつて存在した。そして、今もその場所に頭骨があり、頭骨架の脇には、「ボンガリ頭骨塚」と銘のある日本様式の墳墓も立っている。首狩りを悪しき習慣とみなした台湾総督府は、この「悪習」の根絶に努め、それまで頭骨架に安置されていた頭骨を一括埋葬させたようである。

#### 時を超えて生きる村

『生蕃行脚』ではチカタン社に触れていないが、ここには伝統集落が現存している。現在40戸あまりの住居が完全な形で残り、10人程度が暮らしていて、保存状態は非常に良好だ。外部への広報も盛んで、民宿もあり、学童向けの教育・文化ツアーも組まれている。

チカタン社は戦後少なくとも二度移村しており、もともとのチカタン社は老七佳、最初の移村の地が旧七佳、二度目の移村の地、即ち現在の地が七佳と呼び分けられている。集落が残る老

七佳までは旧七佳との間の登山道歩く方法もあるが、今は産業道路が通っているので、アクセスが非常に便利になった。「世界遺産へ登録しよう」という勇ましい声も上がっている。

#### 聳え立つ聖山・北大武山

『生蕃行脚』の終盤には、パイワン族の聖なる地・北大武山に到達する。北大武山は台湾五嶽の一座、中央山脈最南の3000メートル峰。高屏平野の東端から急峻に立ち上がっているため、

1900年の踏査行の際、森は「パイワン蕃人の発祥の地とし、又彼等の死霊のこの山に還ると云ひ、信仰的にも崇敬せる霊峰」である北大武山への登攀を試みたが果たせなかったと述べている。現在、北大武山登山口につながる自動車道沿線には、カピヤガン社やクワルス社の集落遺構が点在している。そこまで到ると、屏風のごとく立ちはだかる北大武山の崖壁が眼前を遮る。なぜパイワン族にとって北大武山が聖なる山であるのかを感じられる瞬間である。■

※「台湾古道を行く」は不定期で連載します。



左写真：東京大学総合研究博物館

[右]草に覆われた頭骨架跡。日本統治時代に首狩りの風習は根絶したというが、今も二つの頭骨が安置されている。もともとは四つ残っていたが、二つは消失したようである

#### 森丑之助 (1877~1926)

京都府出身。伊能嘉矩と鳥居龍蔵の台湾における人類学研究の成果が当時から評価されていたのに対し、森が評価を得るようになったのは、つい最近のことである。それも森を積極的に評価したのは、むしろ現代の台湾人研究家だった。伊能と鳥居が、当時の日本の人類学の草分け的存在であった東京帝国大学の坪井正五郎の薫陶を受けたのに対し、森は学術的なバックグラウンドを持たなかった。森は、二十余年に渡り、台湾の山岳、溪谷、そして当時生蕃、後には高砂族といわれた原住民の部落を跋山涉水する。森は生涯、台湾原住民を尊愛した。最期は、日本航路の客船内で行方不明となり、海中へ身を投げたとされた。台湾総督府の理蕃政策との板ばさみが原因と言われている。

(本文中の『生蕃行脚』は、楊南郡編著「幻の文化人類学者森丑之助 - 台湾原住民の研究に捧げた生涯」(笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子編訳 / 2005年 風響社出版より引用)

